

大腸粘膜の完全切除ができ、かつ永久的人工肛門が避けられる術式として近年広く行われるようになってきている。術後の排便機能の改善を目的としてS型、J型、H型、W型、Kock pouch など各種回腸嚢が報告されているが、私共の教室では1984年より容量と横幅が期待できるW型回腸嚢を作製しての再建を行ってきた。手術は2期又は3期の分割手術を行っているが、今回は第2期目のW型回腸嚢肛門吻合術の術式をシネで供覧した。術後成績については次演者が発表したが、満足しうる結果が得られている。

3) W型回腸嚢肛門吻合術後の排便機能

山井 健介 (県立加茂病院外科)
 島村 公年・畠山 勝義 (新潟大学第一外科)
 武藤 輝一

潰瘍性大腸炎18例、家族性大腸腺腫症3例にW型回腸嚢肛門吻合術を施行し、術後の排便機能を評価した。臨床スコアを算出し排便状態の経時的变化を評価するとともに、直腸肛門内圧検査、回腸嚢造影を行ない以下の知見を得た。1) 臨床スコアは経時的に増加改善した。2) 1日排便回数は回腸瘻閉鎖後6, 12, 24カ月でそれぞれ 4.3 ± 1.2 , 3.8 ± 1.2 , 3.3 ± 1.0 行と満足のいく結果を示した。3) 回腸嚢最大耐容量と1日排便回数との間に有意の逆相関が認められた。4) 回腸嚢の横径及び拡大率は正常直腸のそれらに比し有意に大きく、1日排便回数との間にもそれぞれ有意の逆相関が認められた。したがって、回腸嚢の最大耐容量、横径、拡大率は排便機能を良く反映し、容量、横径がともに大きなW型回腸嚢肛門吻合術の有用性が示唆された。

4) 回腸嚢肛門吻合術後の quality of life と術後合併症

島村 公年・牛山 信
 岡本 春彦・太田 一寿
 遠藤 和彦・須田 武保
 酒井 靖夫・畠山 勝義
 武藤 輝一 (新潟大学第一外科)

回腸嚢肛門吻合術を施行した潰瘍性大腸炎22症例(W型21例、J型1例)を対象に術後の quality of life と合併症について検討した。1日平均排便回数は 4.3 ± 1.3 回であり、総合的にもほぼ良好な排便機能が保たれていた。日常生活では、食事や飲酒に多少の制約を認めるものの、日常の外出や旅行に制限はなく、術前有職者全員

が就業していた。吻合部縫合不全、肛門腔瘻を各々1例経験しているが、いずれも保存的あるいは手術で治療しており、その他、排尿障害や性機能障害は認められなかった。妊娠、出産の希望もあり、患者の高齢化後の排便機能とともに今後の課題と考えられた。

5) 潰瘍性大腸炎に合併した大腸癌の2切除例

山本 睦生・斎藤 英樹
 桑山 哲治・藍沢 修 (新潟市民病院)
 丸田 春吉 (第一外科)

潰瘍性大腸炎の癌化例は国内でも近年増加の傾向にあり、当科でも最近2切除例を経験したので報告する。症例1は23才女性で、8年間の加療の後盲腸癌、下行結腸癌を発見し、結腸全摘術を施行した。進行度はH₀P₂, C, 3型, 4.0×6.5 cm, Poorly>Sig, s, ly₃, V₀, D, I型, 2.5×2.3 cm, Well>Mucinous, Pm, ly₀, V₀であった。穿孔による骨盤膿瘍を形成しており、真菌血症などのため術後7ヶ月で死亡した。症例2は52才男性で、血便を2年間放置した後、腸閉塞症となり緊急入院し、直腸癌を合併した潰瘍性大腸炎の診断で大腸全摘術を施行した。進行度はH₀P₀, Ra>Rb, 4型, 3.5×5.0 cm, Well, s, ly₃, V₁であった。術後多発小腸穿孔にて再手術施行し、術後1年経過観察中である。癌化の問題や、手術方法の進歩により、今後は難治例や経過観察が十分に行なえない例では、積極的に切除の方向へ進むべきかもしれない。